令和6年度 被災者自らめぐりあい・つながろう！心の復興プロジェクト事業

南相馬ふるさと検定

公式読本

南相馬市への愛着と誇り…自然・歴史・人物等、自信をもって話せること。
ふるさとを自慢できる自分でいたい！あなたも始めてみませんか？

南相馬ふるさと検定！

私たちのふるさとの思いを
大輪のバラに込めて…

報徳仕法

相馬野馬追

南相馬の山・川・海

1 ごあいさつ 1P
2 報徳仕法・相馬野馬追・南相馬の山・川・海 2P
3 南相馬ふるさと検定リスト
今 3P　自然 4P～5P
歴史 5P～10P　人物 10P～13P
その他 14P～15P

NPO法人はらまちクラブ連絡先 090-8258-0840
emoto88@ybb.ne.jp　http://npoharamachiclub.jp/

南相馬ふるさと検定作成にあたり

ごあいさつ

2011年（平成23年）3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0、最大震度7の巨大地震とともに巨大津波におそわれ、東日本大震災と原発事故が起きました。私たちの南相馬市でも636名の方が亡くなり、関連死を含めると 1,156 名の尊い命が犠牲となりました。これらの命はもっともっと生きたかった命です。私たちは生かされています。生かされた私たちは、ふるさと南相馬の復興に努めてきました。

令和3年3月、南相馬の《まちの未来予想図》をみんなで描いてみようと懇談会を開催しました。参加いただいたのは、様々な分野の南相馬市民で、ふるさと南相馬を大切に思ってくれている人たちです。

南相馬未来予想図とは、旧住民も新住民も仲良くつながる南相馬。みんな大好き南相馬の未来予想図は、南相馬で生活する私たち一人ひとりが、住む町の良さを自覚し、地域の資源を活用し、地域のつながりを再生するために、主役となって行動し、そのことに地域や行政などが、サポートする社会となっているまちです。

そして、その第一歩はみんなで“ひと・まち・まつり・ふるさと産品・自然などなんでも”南相馬の魅力を再発見し、市内外に南相馬ブランド・プライドを発信、心一つに力をあわせ well-being の人とまちになることです。

この未来予想図を具現化するため、私たちは「ふるさと再発見クルー会議」を立ち上げ、大調査をしました。これをまとめ、南相馬自慢を内外に発信すべく**「南相馬ふるさと検定」**を作成しました。

多くの皆さまにふるさと検定の挑戦をしていただき、SDGs な心持ちでふるさとツーリズムへの発展となるよう期待し、今後も更新を重ねて参ります。

分野ごとのリストアップは、国・県・市・史跡・学術的な視点を基本としました。

ご指導いただいた南相馬市博物館学芸員二上文彦氏に最大の感謝の意を表します。

今、世界は有事の不安が渦巻いています。

笑顔・夢・感動あふれる元気なまちへ市民一人ひとりの心がけと行動の一歩が大切ですね。

★★★市内のどこでも子どもから高齢者までみんなで学び、**ささえあい**のまちへ★★★

令和６年４月 ふるさと再発見クルー会議　キャプテン　江本節子

ふるさと再発見クルー会議メンバー

南相馬市観光課、南相馬市教育委員会、南相馬市博物館、

福島民報社、NPO 法人はらまちクラブ他市民のみなさま

南相馬市メモ（令和６年５月１日現在　()内は震災前）

人口：55,929 人（71,561人）　面積：398.58km²

小学校：鹿島区２校（4校）原町区8校 小高区１校（4校）

中学校：鹿島区１校 原町区4校 小高区１校　　高校：3校（4校）

市の花：さくら 市の木：けやき 市の鳥：ひばり 市の魚：さけ 市の昆虫：蛍

出典：南相馬市ホームページより

報徳仕法

二宮尊徳の教えにもとづく農村の復興政策。尊徳の高弟で中村藩士の富田高慶（たかよし）を指導者として、飢饉などで荒廃した藩に導入されました。

根底に「至誠」（まごころ・誠実であること）を持ち、「勤労」（懸命に仕事に励む）「分度」（自分の身の丈にあった生活をする）「推譲」（収入の余剰は貯蓄し、将来の人々や社会のために譲っていくこと）を実行するという考えのもと、さまざまな事業が行われ、共に助け合いながら領内の村々の復興が進められました。

相馬野馬追 国指定重要無形民俗文化財

当地方を治めた領主・相馬氏に由来する行事で、約400騎の騎馬武者たちによる行列や、甲冑競馬・神旗争奪戦等、勇壮な祭礼として知られていますが、最終日の野馬懸で野馬を捕らえ神前に奉納し、相馬地方の繁栄と安寧を祈願するという、地域にとって大切な意味を持つ行事です。150年近く7月中に開催していたが、近年の猛暑の状況を鑑み協議の結果、2024年より5月最終土・日・月の開催に変更された。

南相馬市の山・川・海

なだらかな山並みが連なる阿武隈山系、そこから湧き出る水は、河川として土地を潤しながら、暖流と寒流が交じり多様な生きものたちを育む豊かな海へと注ぎ込みます。

市民のシンボルとして親しまれる国見山（563.7m）や懸の森（536.1m）、四季折々の色彩を見せる深い渓谷をもつ真野川や新田川、緩やかに海に注ぐ小高川の風情、野馬追の馬のトレーニング「錬馬」の光景や、東北有数のサーフスポットとしても有名な北泉海岸や烏崎海岸など、南相馬の山・川・海はふるさとの原風景を生み出す存在でもあり、私たちはその多様な恵みを受け生きています。

南相馬市の今

■南相馬市の概要

南相馬市は、平成 18 年（2006）1 月 1 日、旧小高町、旧鹿島町、旧原町市の1市2町が合併して誕生しました。
北の宮城県仙台市・南のいわき市・西の福島市とほぼ等位置で結ばれています。
市の西部は、標高 400 から 500 メートル阿武隈高地が南北に連なり、東部は阿武隈高地から太平洋に向かって流れる新田川、小高川、真野川などの河川によって形成された平地と、それを取り巻く丘陵地・段丘からなります。なだらかな山並、上流は深い渓谷・下流は穏やかな流れをもつ川、暖流と寒流が混じる海など、多様な環境に多くの動植物がすんでいます。
気候は、海洋の影響を強く受ける海洋性気候で、寒暖の差は比較的少なく、夏は涼しく、冬は降雪の少ない、温暖な気象条件に恵まれています。

■位置

東経 140 度 57 分 26 秒／北緯 37 度 38 分 32 秒

■面積

398.58 平方キロメートル

■現住人口

55,929 人（男：29,512 人 女：26,417 人）
※令和 6 年 5 月 1 日現在（市公式HPより）

■市の花・木・鳥・魚・昆虫

花：さくら 木：けやき 鳥：ひばり 魚：さけ 虫：ほたる

・「さくら」選定理由

市内には小高川親水公園、桜平山公園、夜ノ森公園など桜の見所も多く、春の代表的な花として人々に春が到来した喜びと希望を感じさせる日本古来の花です。このように日本人の心の琴線に触れるさくらは、市民にも最も愛され親しまれている花であり、「ひとが集い輝くまち」の象徴としてふさわしい花です。

・「けやき」選定理由

けやきは、昔から人家の防風林として植えられたり、学校や神社のシンボル的な樹木として大切にされてきました。市内でも原町第一小学校のシンボルでもあるけやきや市の天然記念物に指定されている鹿島御子神社の大けやきは、その代表格として、市民に親しまれています。大地にしっかりと根を張り、たくましく堂々とした幹から四方八方に広がる枝に青々とした葉が生い茂る姿は、自然豊かな大地に「みどりを育むまち」の象徴としてふさわしい木です。

・「ひばり」選定理由

相馬野馬追祭場地の雲雀ケ原の名称の由来となっているひばりは、市内に広く生息し、市民にはなじみが深い鳥です。天高く舞い上がり、晴れやかにさえずるその姿は、のどかな中にも人々に明日への夢と希望を感じさせ、未来へ向けて躍動し、発展する「みんなで築くまち」の象徴としてふさわしい鳥です。

・「さけ」選定理由

故郷を忘れずに戻ってくるさけは、私たちに郷土愛と郷土への帰すう意識を感じさせてくれるとともに、昔から観光産業と食文化の振興に一役を担っている魚です。太平洋から市内の小高川、真野川、新田川などを伝い阿武隈高地の山裾まで遡上するさけは、正に海と川と山を一つにつなぐ魚であり、「豊かな自然が心を一つにつなぐまち」の象徴としてふさわしい魚です。

・「ほたる」選定理由

海・川・山に囲まれ豊かな自然を残す南相馬市の中で、夏の夜の風物詩として、清らかに流れる川辺でほたるが飛び交う情景は、市民に自然の豊かさと癒しを感じさせるものです。このような情景を後世に伝え、いつまでもほたるが生息する美しく豊かな自然環境を守っていくための「自然と共生するまち」の象徴としてふさわしい昆虫です。

ふるさと検定リスト

分野	No.	テーマ	解説
自然（天然記念物等）	1	豊富な化石	古生代～中生代～新生代、すべての地質年代の化石が採集される大変恵まれた地域であり、福島県最古の化石（約3億8000万年前）が産出します。ここ20年間ほどで、腕足類、ソテツ類、アンモナイト、カニ、二枚貝などの新種の発見・報告が相次ぎ、地質・古生物学界では有名。数億年にもわたる地球の歴史を、身近に観察することができます。
	2	大悲山の大杉	県指定天然記念物 小高区泉沢 大悲山の薬師堂石仏前にあり、目通り8.4メートル、高さ約45メートルを計る県内有数の大木です。樹齢は千年に及ぶものと推定され、薬師堂石仏が作られたころに育ちはじめた木であると考えられています。
	3	海老浜のマルバシャリンバイ自生地	県天然記念物 鹿島区南海老 シャリンバイは、太平洋側では本州東北南部以南に自生する常緑灌木で、5月頃から白い小さな花をつけ、黒紫色の山ブドウのような実をつけます。鹿島区は群落をつくり自生する北限域とされ、「海老浜のマルバシャリンバイ自生地」が県天然記念物となっています。
	4	泉の一葉松	県天然記念物 原町区泉 樹齢はおよそ400年のクロマツ。1本の幹に1葉と2葉の松葉がともに生えるめずらしい特性から、県天然記念物に指定されています。震災の津波で被災し塩害に耐えながらも、その後、松くい虫の侵入で大きく衰えてしまい、現在は、後継樹が育成されています。
	5	初発神社のスダジイ樹林	県天然記念物 原町区江井 スダジイは比較的温暖な地域に生育するブナ科の植物です。初発神社のスダジイ樹林は、太平洋岸における本種の北限として、県天然記念物に指定されています。
	6	国見山	原町区の西方に位置する標高563.7メートルの山で、太平洋をはじめ市全域を見渡すことができます。市を代表的する山として市内学校の校歌にも歌われています。中腹の「国見山森林公園」にはライブカメラも設置されており、登山せずとも眺望映像を楽しむこともできます。
	7	懸の森	小高区西端・原町区の境界に位置する、小高区最高峰・標高536.1mの山で、小高区民にとってシンボル的な存在。山頂にある大山祇神社は、戦中は“いくさ神”として近隣の信仰を集め、毎月17日の縁日には出店が立ち、多くの人でにぎわったという。

	8	南相馬の山・川・海	なだらかな山並みが連なる阿武隈山系、そこからあつまる水は、真野川、新田川、太田川、小高川などの河川によって土地を潤しながら、暖流（黒潮・日本海流）と寒流（親潮・千島海流）が交じり多様な生きものたちを育む豊かな海へと注ぎ込みます。山・川・海ともに、ふるさとの原風景を生み出す存在でもあり、私たちはその多様な恵みを受け生きています。
歴史（文化財）	9	浦尻貝塚	国史跡　小高区浦尻 約5700～2800年前（縄文時代前期～晩期）という長い間営まれた、縄文時代の貝塚を持つ中心的な大規模集落跡です。長期間にわたり営まれていることと良好な保存状態が特筆され、東北地方の縄文時代を知るうえで、極めて情報量の多い遺跡として知られています。
	10	桜井古墳	国史跡　原町区上渋佐 長さ74.5メートルを測る東北地方最大級の大型古墳です。古墳時代前期（4世紀）に新田川河口域に登場した有力な豪族の墓と考えられます。東日本に多く分布する前も後ろも四角い「前方後方墳」であることが特徴です。墳頂には棺の跡が2つ見つかっており、長さ7メートルに及ぶ木棺が安置されていたとみられます。棺の中は未調査ですが、副葬品が収められていると考えられます。
	11	真野古墳群	国史跡　鹿島区寺内・小池 古墳時代の中後期（5～6世紀）の福島県を代表する群集墳で、A地区（鹿島区寺内）・B地区（同区小池）の2つの地区に、約120基以上の古墳が確認されています。古墳から出土した「金銅製双魚佩」（2匹の魚が腹を合わせた意匠の刀飾り）は全国的にも数少ない副葬品です。
	12	羽山横穴	国史跡　原町区中太田 古墳時代の終末期（6世紀末）の豪族の墓です。浜通り地方では、古墳時代終わりになると岩山を掘った横穴墓が多くつくられました。なかでも羽山横穴は死者が埋葬される玄室の壁や天井に、渦巻文・人物等が描かれており、当時の世界観、宗教観を知ることができる重要なお墓です。
	13	泉官衙遺跡	国史跡　原町区泉 奈良・平安時代（7世紀末～10世紀後半）に、今の南相馬市とほぼ同じ地域であった「行方郡（なめかたぐん）」を統治した郡役所跡（官衙遺跡）です。発掘調査により郡庁院（政務を行った役所の中心施設）、正倉院（租税の収納施設）、舘院（上級役人等をもてなして宿泊させる施設）などが発見されています。

ふるさと検定リスト

	14	横大道製鉄遺跡 	国史跡 小高区飯崎 奈良・平安時代（8～9世紀）の大規模製鉄遺跡です。南相馬市では、海浜で豊富にとれた砂鉄を原料とした製鉄が盛んに行われ、全国有数の製鉄工業地帯として、奈良・平安時代の国家の経営に大きな貢献をしていました。本遺跡は、奈良時代の後半に本地方に導入された新技術である竪型炉が計画的に配置された大規模な製鉄遺跡として貴重であり、国史跡に指定されています。
	15	大悲山の石仏 	国史跡 小高区泉沢 「薬師堂石仏」「阿弥陀堂石仏」「観音堂石仏」を総称して「大悲山の石仏」とよんでいます。最も残りの良い薬師堂石仏は高さ2～3メートルの石仏が立ち並び、高さ約9メートルを誇る観音堂石仏は十一面千手観音像であり、この石仏群の主尊と考えられています。震災後の発掘調査により、観音堂石仏は 10 世紀初めにはつくられていたと実証されました。東北地方最大、最古の石仏群であり、日本有数の古代の石窟寺院といえます。
	16	旧武山家住宅 	国指定重要文化財〔建造物〕 原町区北原 江戸時代の終わり（18 世紀後半頃）に建設された、農村に住んだ武士「在郷給人」の住まいです。当時の一般的な農家より大きく座敷には床の間や棚、書院などが備えられ、武士としての格式を表しながらも、質素なつくりとなっており、当時の在郷給人の暮らしぶりを伝えています。
	17	相馬野馬追 	国指定重要無形民俗文化財 当地方を治めた領主・相馬氏に由来する行事で、約400騎の騎馬武者たちによる行列や、甲冑競馬・神旗争奪戦等、勇壮な祭礼として知られていますが、最終日の野馬懸で野馬を捕らえ神前に奉納し、相馬地方の繁栄と安寧を祈願するという、地域にとって大切な意味を持つ行事です。
	18	刺繍 阿弥陀名号掛幅 	国指定重要文化財〔工芸品〕 鹿島区南屋形阿弥陀寺 中央に大きく「南無阿弥陀仏」の六字名号（仏・菩薩の名）が髪の毛で刺繍された掛軸。名号を人毛の刺繍で表していることから、故人の冥福を祈って仏事供養を営む、追善を目的に製作されたと考えられます。保存状態がきわめて良く、当初の表具や金具などを伝える、鎌倉～南北朝時代（13～14 世紀）の優れた工芸品です。

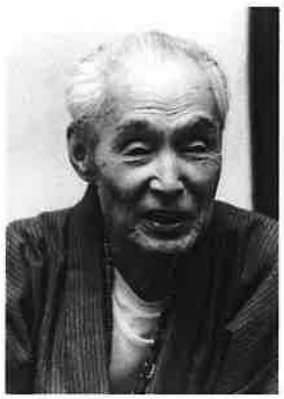
	19	延喜式内社（行方八社）	平安時代の史料「延喜式」に記載されている神社を式内社といいます。朝廷が定めた官社であり、市内には鹿島御子神社（鹿島区鹿島）、御刀神社（鹿島区南海老）、多珂神社（原町区高）、冠嶺神社（原町区信田沢）、日祭神社（原町区大甕）、押雄神社（原町区北新田）、高座神社（原町区押釜）、益多嶺神社（小高区大井）の8社があります。福島県の中では特に多く、この地域が古代の重要地点であったことを示しています。
	20	奥州相馬氏	相馬氏は、源頼朝 配下の千葉常胤の次男・師常が、下総国相馬郡を領し「相馬」を名乗ったことから始まります。6代目の重胤が鎌倉時代後期に奥州行方郡（現南相馬市）に拠点を移して以降、相馬氏は周辺に勢力を広げ、さまざまな危機的状況を乗り越えながら明治の廃藩置県までこの地を治めました。令和5年（2023）は、重胤が下向してからおよそ700年にあたります。
	21	小高城跡（相馬小高神社） 	県史跡 小高区小高 中世における奥州相馬氏の居城であり、相馬重胤の子光胤が建武3年（1336）に築城したとされています。以後、中村城（相馬市）に移る280 年間、政治・軍事の拠点でした。現在は相馬野馬追の野馬懸が行われる相馬小高神社となっています。
	22	同慶寺 	市史跡 小高区小高 鎌倉時代の建保元年（1213）開基と伝わり、江戸時代以後は相馬氏の菩提寺となりました。相馬家 16 代当主義胤から 27 代益胤まで、江戸時代の相馬家一族の墓が築かれています。同慶寺に立ち並ぶ五輪塔は近世大名家の威厳を示しているといえるでしょう。また、これらは大名家の葬送儀礼の変遷をうかがうことができる貴重な資料でもあります。
	23	相馬太田神社 	原町区中太田 相馬野馬追を行う相馬三社の一つ。江戸時代まで藩主相馬家の武家行事だった野馬追を、明治時代に神社の神事として再生させる際に、主導的な役割を担った神社です。
	24	牛越城跡 	原町区牛越 慶長2年～8年（1597～1603）、相馬家が小高城に替わる新たな本拠とした城。ここを居城にしていた際に関ヶ原の戦いがあり、不参戦だった相馬家は一時改易となったため、牛越城は「縁起が悪い城」とされ、わずか数年で廃城、再び居城を小高に移し、間もなく中村城へ移りました。

	25	朝日座 	国登録有形文化財〔建造物〕 原町区大町 大正 12 年（1923）建築。芝居兼常設活動写真小屋「旭座」として建築され、現在も芝居小屋のつくりが残されています。昭和 26 年（1951）に「朝日座」と改名し映画館となりました。平成3年（1991）に閉館しましたが、市民団体が中心となり映画上映しており、レトロな映画館として親しまれています。
	26	髙島家住宅コンクリート蔵 	国登録有形文化財〔建造物〕 小高区 昭和初期建築の鉄筋コンクリート造りで屋上付の蔵です。屋上の張り出し部分にまわされた意匠が特徴的。和洋折衷の独特の建物で、2階の室内意匠は洋風ですが、畳敷となっています。
	27	原町無線塔 	原町区高見町（現：高見公園内）に立っていた、201 メートルの鉄筋コンクリート塔。大正 10 年（1921）から稼働した対米無線局「磐城無線電信局原町送信所」の主塔として建てられ、建設当時はアジアでナンバー1の高さを誇りました。大正 12 年（1923）の関東大震災の第一報をアメリカに送信し、世界中から首都圏救援の物資が集まるきっかけを作る活躍をしました。昭和 57 年（1982）に老朽化によって取り壊されるまで、地域のシンボルとして親しまれました。
	28	大谷家住宅東蔵、中蔵、門 	国登録有形文化財〔建造物〕 鹿島区栃窪 明治時代から代々郵便局を営み、現在は蔵の中で簡易郵便局を開業しています。中通りに続く、通称「塩の道」と呼ばれる街道に面した自然豊かな環境にあります。明治から昭和にかけて造られた大きな土蔵2棟と、その間に門が立ち並ぶ景観が特徴です。
	29	報徳仕法	二宮尊徳の教えにもとづく農村の復興政策。尊徳の高弟で中村藩士の富田高慶を指導者として、飢饉などで荒廃した藩に導入されました。 根底に「至誠」（まごころ・誠実であること）を持ち、「勤労」（懸命に仕事に励む）「分度」（自分の身の丈にあった生活をする）「推譲」（収入の余剰は貯蓄し、将来の人々や社会のために譲っていくこと）を実行するという考えのもと、さまざまな事業が行われ、共に助け合いながら領内の村々の復興が進められました。
	30	報徳仕法による用水路・ため池 	真野川から唐神ため池、南屋形の石宮ため池などに入る用水路「七千石用水」、報徳仕法最難関の浪江町から小高区に至る「室原川分水路（小高疎水）」、総延長4キロメートルにわたる「萱浜用水路」など、中村藩士・荒至重が設計した多くの用水路があります。江戸時代後期、地域復興のために尽力した先人たちが築いたこれらの施設は、現代を生きる私たちにも受け継がれ、活用されています。

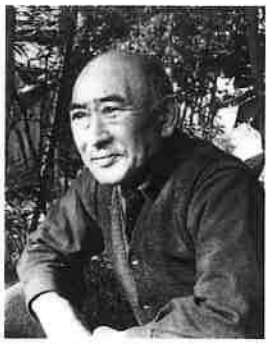
ふるさと検定リスト

	31	原町飛行場 	戦前～戦中、原町区（馬場・大木戸・上太田・本陣前）に設置されていた飛行訓練場。太平洋戦争末期の昭和 19 年（1944）には特攻隊錬成基地として、陸軍特別攻撃隊が編成され、若い飛行兵を次々と戦地に派遣するという悲しい歴史を持っています。現在の飛行場跡には、その面影はほとんど無くなりましたが、格納庫跡のコンクリート部分、飛行場正門跡、飛行場開設時に建立された雲雀ケ原神社（航空神社）など、わずかに当時の名残をとどめています。
	32	原ノ町駅 	明治31年（1898）に全線開通した常磐線は、モノ・ヒトの動向に大きな変化をもたらしました。南相馬市内の5つの駅の中でも、特に原ノ町駅は、機関庫（機関車を格納・整備する車庫）・転車台（車両を方向転換させる機械）が設置され発着駅となったことで、停車時間も長く、駅前通りには旅館・土産物店などができ、人の生活の流れに変化が生まれ活性化し、人口増加など地域の発展に大きく寄与しました。
	33	桃内駅の石碑 ？ 	JR 桃内駅前に立つ江井義隆、天野秀延等、地域の偉人の名が彫られている石碑。東日本大震災の影響で台座が破損しています。 *石碑に関する文献が見当たらない為、皆さまの情報提供をお願いします！*
	34	原町空襲	米軍による日本本土への空襲は、昭和 19 年（1944）末頃から本格化しました。翌 20 年（1945）2月 16 日には原町初の空襲として原町紡織株式会社が攻撃を受け、4名が犠牲となりました。約半年後の8月9・10 日には原町飛行場をはじめ原ノ町駅、工場、学校などが攻撃され、10 名の命が犠牲となってしまいました。
	35	石神発電所	原町区大谷に位置し、新田川から取水する水力発電所。昭和15年（1940）に着工、19年（1944）に竣工・運用を開始しました。最大出力 8700 キロワットの能力を持ち、常時2200キロワットで運転しています。かつては、近場の児童・生徒の遠足コースにもなっていました。
	36	日吉神社のお浜下り 	県指定重要無形民俗文化財 鹿島区江垂 お浜下りは、御神体と神輿を海浜に運び、潮水を奉納し、多くの芸能が行われるまつりです。鹿島区の真野川流域の社寺が多く行っており、ほとんどが 12 年に1度行われます。日吉神社は申年に浜下り行事を行います。 江垂の宝財踊りは、南北朝時代の霊山落城の故事に由来し、山伏など異なる姿の7人によって演じられる風流踊です。日吉神社の浜下り行事に欠かせない大事な芸能です。 （出展：南相馬市発行「南相馬の文化遺産」）

	37	東日本大震災	平成23年（2011）3月11日 14 時46 分、三陸沖を震源とする観測史上最大のマグニチュード9.0という巨大地震は、大津波を引き起こし、さらに、その後発生した東京電力福島第一原子力発電所事故によって未曽有の複合災害となりました。当市でも甚大な被害を受け、津波による636名もの犠牲者を生み、震災関連死者数は県内最多の520名（2022 年 3 月 31 日現在）にもおよびました。
南相馬の人物	38	富田高慶 （1814～1890） 	中村藩士・農政家　宇多郡中村（現相馬市）で中村藩士の家に生まれる。疲弊した藩の再建方法を探す中で二宮尊徳の報徳仕法に出会い、二宮に弟子入りし高弟となりました。富田は中村藩で二宮尊徳の代わりに報徳仕法を指導し、農村と藩の立て直しに大きな成果をあげました。尊徳の死後、その教えを広めるため尊徳の伝記『報徳記』や『報徳論』を著わしました。明治維新後は石神村に移住していた二宮家（現在の石神生涯学習センター）の世話をするためその 東隣 に移住し、76 歳で亡くなるまで二宮家と報徳仕法に対して力を尽くしました。
	39	荒至重（1826～1909） 	中村藩士・和算家・技術者　宇多郡中村（現相馬市）で中村藩士の家に生まれる。少年時代から和算で頭角をあらわし、21 歳で江戸の関流和算家に入門し、算術や天文の勉強を重ねたあと、その能力を報徳仕法に注ぎました。北郷（現南相馬市鹿島区）の代官に任命され、優れた算術や測量技術で、ため池や用水路などを数多く設計し、水不足を解消して藩の立て直しに大きく貢献しました。鹿島区の七千石用水、浪江町から小高区に至る室原川分水路（小高疎水）、原町区の萱浜用水路など、荒至重が設計した多くの用水路があります。
	40	半谷清寿（1858～1932） 	実業家　相馬郡小高町（現南相馬市小高区）生まれ。三春師範学校（現福島大学）を卒業し、教員を2年務めた後、東北地方の発展を期して小高で実業家となりました。活動は乾田法の奨励、養蚕業の研究と相馬織物会社の設立（相馬羽二重業の産業化につながる）、イグサ栽培の奨励とゴザ織りの伝習、常磐線開業への尽力、小高銀行の設立、小高銀砂工場の設立など多種多様で、地域発展の基礎を築きました。後半生は富岡町夜の森の開拓を行い、半谷農場を経営したほか、県会議員・衆議院議員も務めました。相馬野馬追の「火の祭」を考案したり、富岡で植えた桜が後に夜の森の桜並木となったりするなど、観光面でも足跡を残しました。

	41	鈴木安蔵（1904～1983）	憲法研究者　相馬郡小高町（現小高区）生まれ。仙台第二高等学校を経て、京都帝国大学文学部哲学科に入学後、経済学部に転部。大学での学連事件で逮捕され、日本で初めて治安維持法違反で有罪判決を受けました。大学を自主退学した後、獄中で憲法学・政治学を研究し、終戦後、民間の7人で構成された「憲法研究会」の中心として『憲法草案要綱』を作成・発表しました。それがGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）に着目され、現在の日本国憲法の骨子となったことから、「日本国憲法の間接的起草者」とよばれています。
	42	亀井文夫（1908～1987）	ドキュメンタリー映画監督　相馬郡原町（現原町区）生まれ。留学先のソビエトで見た映画に感動して映画を学びはじめ、帰国後『支那事変後方記録 上海』（1938年）など記録映画を制作し評価される。発表作品が当時の国の方針と合わず、昭和16年（1941）に映画界でただ一人、治安維持法違反容疑で検挙されました。戦後は『日本の悲劇』がGHQによって上映禁止されるなど不遇の時期もありましたが、全国の軍事基地を取り上げた『基地の子たち』や原爆をテーマとした『生きていてよかった』などの作品を精力的に発表。生涯にわたり戦争や核問題、差別、経済成長による社会の歪みなどについて注目し、作品は高い評価を得ました。
	43	埴谷雄高（1909～1997） 	小説家・評論家　本名：般若豊　相馬郡小高町（現南相馬市小高区）の旧中村藩士の家系に台湾で生まれました。鹿島町出身の荒正人らとともに昭和21年、戦後文学を主導する文芸同人雑誌『近代文学』を創刊してそのリーダー格となり、代表作となる『死霊(しれい)』を連載しました。戦後文学の最高峰とも評される『死霊』は、第9章の一部分まで50年以上にわたって書かれた未完の大作で、昭和56年（1981）に日本文学大賞を受賞しました。また、『闇の中の黒い馬』は昭和45年（1970）に第6回谷崎潤一郎賞を受賞しました。

	44	荒 正人（1913～1979）	文芸評論家　相馬郡鹿島町（現鹿島区）生まれ。東京帝国大学英文科（現東京大学）卒業後、中学教師をしながら同人誌で評論を執筆。昭和21年（1946）に埴谷雄高、小田切秀雄らとともに文芸同人雑誌『近代文学』を創刊し、活発な評論活動を展開しました。プロレタリア文学の再評価をめぐり、中野重治との「政治と文学論争」などを通して戦後文学に重要な問題提起を行った。一方、日本文学研究、英米文学研究にも熱心で、特に夏目漱石研究に力を入れ、厳密な本文校訂と詳細な解説を加えた『漱石文学全集』の編さんにつとめ、その別巻『漱石研究年表』は昭和49年に第16回毎日芸術賞を受賞しました。
	45	島尾敏雄（1917～1986）	作家　相馬郡小高町（現小高区）出身の両親のもと横浜で生まれる。少年時代から同人誌を創刊するなど文学に熱中しました。戦中に海軍少尉として奄美に配属され、特攻隊長として極限状態を経験し、この時の経験を『出発は遂に訪れず』などに執筆しています。戦後、高校教師をしながら執筆活動を続けるなか、妻が心因性の病気を発病。妻との間の心の揺れ動きについての経験をもとに、代表作『死の棘(とげ)』（昭和53年［1978］に第10回日本文学大賞受賞ほか）を発表しました。ほか受賞作品多数。没後、幼少時によく帰郷した小高に葬られました。
	46	羽根田利夫（1910～1992）	天文研究家　相馬郡原町（現南相馬市原町区）生まれ。少年時代から天文学に興味を持ち、自宅近くに手作りの観測小屋をつくり、自分で作った天体望遠鏡で天体観測を続けました。約40年にわたる天体観測は、1978年9月1日の新彗星(すいせい)発見として結実しました。当時、羽根田氏は68歳で、世界最高齢の彗星発見者となりました。新彗星は羽根田氏と、ほぼ同時に発見した南アフリカのカンポス氏の名前から「ハネダ・カンポス彗星」と名付けられました。
	47	大曲駒村（1882～1943）	美術評論家、川柳研究家　小高村（南相馬市小高区）生まれ。本名は大曲省三。東京で銀行に勤めるかたわら、俳句活動に力を注ぎました。明治34年(1901)、鈴木余生（憲法学者鈴木安蔵の父）、齋藤草加らと、小高で俳句グループ「渋茶会」を結成、余生が亡くなった後「浮舟会」を作るなどし、20代前半ながらも、小高地域の俳句を中心とする文化運動を開拓した功労者です。また、『川柳大辞典』を始めとする川柳関連書籍、そして、関東大震災の記録として日本最初に書かれたとされる『東京灰燼記』などの著書があります。

	48	豊田君仙子（1894～1972） 	俳人　本名は豊田秀雄 相馬郡福浦村（現南相馬市小高区）生まれ。1913年、福島師範学校を卒業後、教師として活躍。佐倉小学校長、八沢小学校、金房小学校の校長を経て、教え子の福浦村長・天野秀延に招かれ助役として村政に参加しました。戦後は、小高町教育委員会委員長、文化財保護調査委員として文化行政で功績を残しました。優れた俳句の腕前で、福島民報社、福島民友新聞社などで俳句の選者として活躍したこともあり、県下に広くその名は知られ、県内19か所に句碑が立てられている他、市内の学校校歌の作詞者としても名を残しています。
	49	天野 秀延（1905～1982）	イタリア音楽研究家　相馬郡福浦村（現南相馬市小高区）生まれ。小高町民歌、原町市民歌や浜通り地方の学校校歌を多く作曲しており、各地方の小中学校の音楽指導も行っていました。合奏指導を受けた学校は、県内一位、東北大会最優秀賞など優秀な成績を収めました。執筆した『現代イタリア音楽』（1960）とイタリア音楽の研究で、第11回芸術選奨文部大臣賞（1961）を受賞している。また、福浦村の村長に就任し、恩師である豊田君仙子を助役に迎えて村政にあたりました。
	50	平田良衛(1901～1976)	社会運動家　相馬郡金房村（現南相馬市小高区）出身。金房小学校、相馬中学校、第二高校を経て、東京大学を卒業、プロレタリア科学農業問題研究会ドイツ語教師となり『日本資本主義発達史講座』の企画・編集を担当しました。昭和20年（1945）小高にもどり、金房村の荒れていた土地を開拓しました。高村光太郎の詩「開拓十周年」を碑にして金房村開拓組合入植十周年の記念に建立した人物でもあります。また、日本共産党福島県地方委員会責任者（書記長）もつとめました。
	51	杉山 元治郎（1885～1964）	政治家・農民運動家・牧師　大阪の貧しい農家で育ち、府から学資補助を受けられる大阪府立農学校へと進学すると、そこで農業の実際的な知識と技術を身に付けました。その後キリスト教に入信し東北学院神学部へ進学。卒業すると、明治末～大正時代に小高町の小高教会の牧師として伝道に励むと同時に、自ら「杉山式互用犂（ごようすき）」などの農具を考案したり、土壌学や肥料学の講義をするなど、地元の農民から大変信頼された。その後大阪へ戻り、日本農民組合の創立によって組織的な農民運動を確立するなどし、「農民の父」とも称されました。
	52	渡部 晴雄（1893～1969）	考古学者　福浦村（現南相馬市小高区）耳谷出身。「日本考古学協会」本県第一号会員として指導的立場に立ち、開発に伴う文化財保護と人材育成に貢献した先覚者。12、3歳ごろ家の前の水田の堀を創る工事中に、壊れた土器類が多く出土し、興味を持って集めたのがのちの研究につながりました。

その他（郷土料理・伝統芸能の継承・民謡・歌・施設）	53	ベンケイ 	南相馬市原町区の萱浜地区（特に北萱浜）に伝わる郷土料理。昔はお正月用の保存食として重宝され、浄土真宗のお講の時にも供されるハレの日の大切な食べ物でした。現在は材料となる大根、芋がら（里芋の茎を干したもの）の収穫時期（晩秋～冬）に食べる季節の味として親しまれています。
	54	ホッキごはん 	ホッキ貝（ウバガイ）の炊きこみごはん。この地域で最も一般的なホッキ貝の調理法です。来客時のおもてなし、お祝い事、遠足などさまざまな場面に登場します。 栄養豊富な寒流（親潮・千島海流）と暖流（黒潮・日本海流）が混じり合う相双沖のホッキ貝は、成長が早いため、大きくてもやわらかく、甘みがあります。
	55	カツオの焼き漬け 	焼いたカツオを生姜の入った醤油ベースの漬け汁（醤油、みりん、酒、砂糖など）の漬け汁に漬け込んだもの。浜通り地方独特の食べ方です。南相馬市では昭和初期までカツオ漁が行なわれており、カツオは身近な魚でした。保存技術のない時代、カツオを無駄なくおいしく食べきろうと工夫した先人の知恵から生まれた料理です。
	56	凍み餅 	うるち米の粉にもち米を混ぜ、ヨモギやゴンボッパ（オヤマボクチ）などをつなぎとして搗き込んだ餅です。冬の寒さの厳しい日に一晩屋外で凍らせ、その後、軒下など直射日光のあたらないところでじゅうぶんに乾燥させることで、長期保存が可能になります。食べるときは水につけて戻し、焼いて食べます。
	57	柿餅 	うるち米の粉と干し柿や柿の皮を乾燥させたものを一緒に蒸かして、搗き込んだ餅です。柿の色で餅はうっすらと赤みがかり、ほのかな甘みがあります。
	58	アンコウのとも和え 	アンコウの肝を味噌、酒、砂糖で炒めたところに湯がいてほぐしたアンコウの身や皮、肝以外の内臓を細かくして入れ、水で戻した切干大根も加えて炒ったもの。
	59	ガニマキ 	生きているモクズガニを石臼で潰してザルでこし、水を加えて火にかけます。すると不思議なことにカニの身がふわふわと固まって浮いてきます。味つけは味噌と醤油。お好みで豆腐やネギ、ミツバなどを加えます。カニのエキスが溶け込んだ茶色い液体からふわふわの卵とじのような物体が浮かんでくるのは魔法のようです。

ふるさと検定リスト

	60	相馬盆歌	旧中村藩領の市町村に広く流布する盆踊唄。もともとは「盆踊唄」と呼ばれていたが、昭和12年（1937）民謡歌手・鈴木正夫（初代）が「相馬盆唄」の名でレコードを出したことで、この名が浸透しました。昭和30年（1955）第6回NHK紅白歌合戦では、歌手鈴木正夫が、この唄で出場しています。
	61	相馬流れ山	相馬野馬追に欠かせない祭り唄として知られる。これには、陣羽織・陣笠姿の踊り手が、軍扇や馬柄杓を持って躍る「流れ山踊」もあります。唄の起こりは不明ですが、相馬市北部ではかつて田植え唄としてもうたわれていました。
	62	新相馬節	戦後、相馬の堀内秀之進（堀内流民謡の祖）が、「草刈唄」を基に、宮城県から福島県にかけて伝わる「石投げ甚句」を加えて編曲し、堀内の弟子・鈴木正夫がアレンジを加えて歌ったもの。
	63	ロボテス （福島ロボットテストフィールド）	福島イノベーション・コースト構想に基づき、福島県南相馬市及び浪江町に整備を進めていた「福島ロボットテストフィールド」は、無人航空機、災害対応ロボット、水中探査ロボットといった陸・海・空のフィールドロボットの一大開発実証拠点として、2020年3月に全面開所しました。

～出典～

No.36 南相馬市発行「南相馬の文化遺産」

No.40.41.43.45.47.48 南相馬市発行「おだかの人物」

その他 南相馬市博物館提供

“南相馬市ふるさと検定ツーリズム”とは

南相馬ふるさと検定に触れた人々が、市内外に発信しふるさとツーリズムとして定着することを目指しています。

例えば…

「地方と都市の交流ツアー」…… 草むしりツアー、地方のあたりまえが都会では新鮮。人を切り口とした仕組みを作り、人に会いに行く。空も海も見渡せるのが南相馬。

「ふるさと食リポ」…… 達人の郷土料理を味わい食リポで発信。

「ふる検ツアー」…… ふるさと検定に掲載されている場所へ出かけ、ふるさと再発見にふれる。

「学芸員を師とした歴史教室」…… 探求学習。地元の歴史ファンの発掘と、そのコミュニティ創出。

皆さんも南相馬ふるさと検定でそれぞれの一歩を踏み出してみませんか。